読売新聞社賞

差し出された「手」

［テーマ①私の異文化交流体験記］

東京都　創価高等学校　3年
西野　咲希

昨年2月、学校の研修旅行でフィリピンを訪れました。現地では、首都マニラの学校での研修や、孤児院での交流、そして、警察付き添いのもと、マニラのゴミ集積場付近に広がるスラム街、「スモーキーマウンテン」の散策が予定されていました。この場所は、絶えず立ち上がる煙からその名がつけられ、多くの住民がゴミの中から再利用できるものを探し、生計を立てています。

私は出発前、この研修旅行での交流を通し、現地の方々の考え方や文化を理解したい、きっとできるだろう、とポジティブに考えていました。育った環境がどれだけ違っても、人として誠実に向き合い、同じ目線で対話すれば分かり合えると信じていたからです。

研修初日のマニラの学生たちとの交流では、その信念に対する自信が強まりました。拙い英語ながら、“相手を知ろう”という誠実な気持ちで積極的に話しかけると、会話は弾み、彼らとすぐに打ち解けることができたからです。

しかし、スラム街を訪れる当日、安全上の理由から、散策は中止に。代わりにスラム街の橋の上から数分間、街を眺めることになりました。バスを降りた瞬間、下水道のような強烈な臭いに驚愕（きょうがく）しました。橋の下を流れるのはゴミが大量に浮く“泥川”で、その水上には、スラムの家々がひしめき合っていたのです。そこでは、親子が生活で出た汚水を、当たり前のように川に捨てていました。後で調べると、スラム街にはゴミ捨て場がなく、ゴミを道や川に捨てるのが普通で、水辺にス

ラムが集中しているのは、ゴミや汚水を簡単に捨てられるためだと知りました。

私が最も衝撃を受けたのは、私たちのバスの隣のトラックにもたれかかる小学生くらいの少年たち、5人のストリートチルドレンでした。熱いコンクリートの上にもかかわらず、サンダルを履いているのは2人だけで、3人ははだしでした。

彼らが私たちの方を向いて立っているのを見た時、私の心に浮かんだのは“見ていいのだろうか”という葛藤でした。彼らを見つめることで、「見せ物じゃない」と思わせてしまうかもしれない。手を振れば、安易な希望を与えてしまうかもしれない。一挙手一投足が、彼らを傷つけるのではないか――そんな恐怖心に襲われ、身動きが取れませんでした。そんな中、彼らは手を差し出してきました。私は初めて、自分の無力さを痛感しました。その目は「何かちょうだい」と訴えていましたが、同時に「どうせ何もくれないだろう」という諦めも感じられました。事前の学習で、その場限りの手助けは根本的な解決にならず、かえってトラブルを生む可能性があると知っていたこともあり、私は手助けどころか、身動きすらほとんどできませんでした。

その後、その光景は心に焼き付いて離れませんでした。特にフィリピン滞在中は、“今この研修旅行を楽しんでも良いのだろうか。あの子たちに何もできなかったのに。あのような子どもたちが、今もお腹を空かせているのに”と。

今でも、その少年が差し出してきた「手」を鮮明に覚えています。ですが、その光景はなぜか既視感がありました。それは、小学生の時から募金活動のたびに見てきた、ユニセフのポスター、子どもたちのやせ細った手が差し出された写真です。ポスターでその写真が使われている理由。それは、現地で手を差し出されたユニセフの人たちも、私と同じことを実感したからなのでは。そう、思えました。

一方で、ポスターは今まで、私の目の前にあっただけとも感じました。ポスターに写る子は、私が募金という行動に出るかどうかを知るすべがありません。それは、私が彼らに、自分の人間性を「値踏み」されないということです、しかし、目の前に対峙(たいじ)したスラムの子は違いました。スラムの子にとって、私は何の肩書も情報もない、通りすがりの外国人の一人でしかありません。私は“これから行う行動によって、彼らに人間性を値踏みされてしまう”という恐怖に立ちすくみました。

それは、マニラの学生との交流で感じなかった壁でした。彼らは、私たちの境遇（日本から研修に来た高校生）を知っており、そこから関係を築ける安心感があったからです。

心さえあれば、言葉が通じれば、容易に分かり合える？ それは大きな間違いでした。研修旅行は、自分の無力さと異文化理解の困難さ、「心」や「言葉」だけでは乗り越えられない「壁」を教えてくれました。

教科書で教わる異文化は、そのほとんどが表層的な知識でしかありません。私は、安易に相手の境遇や心を理解できると考えていたことを反省し、もっと謙虚に、もっと深く「学び」に向き合おうと心に誓いました。

想像の及ばない異文化に対峙(たいじ)して実感した、自分自身の心の迷いや恐怖を乗り越えるために。生涯忘れ得ない、あの差し出された「手」に報いるために。